

「神を信じるということ」(要旨)

聖書箇所：創世記31章43~55節

【1】 ラバンとの決別

本朝の聖書箇所は、帰郷を決意したヤコブが叔父ラバンとの決別に際して結んだ契約の記録です。二人が石塚を作り契約を結んだのは、お互いの間に境界線を設けるためでした。石塚を目印に、両者の勢力の範囲を定めたのです。ヤコブは石を取ってそれを立てて石の柱とし、また石を集めて石塚を作り、そのそばで食事をしました(創世記 31:46,54)。親睦のための会食ではありませんでした。山でいけにえをささげ一族で食すという儀礼行為のための食事でした。こうしてヤコブとラバンは互いに契約を守ることを誓いました。その際、ラバンは石塚を「エガル・サハドタ」(アラム語)と名付け、ヤコブは「ガルエデ」(ヘブル語)と名付けました。同じ「証しの塚」をあらわす言葉です。ヤコブは敢えて自分の母語に言い換えることで、ラバンとの決別と帰郷の意を明確にしました。

【2】 神の約束の実現

この契約によって、ラバンの家で得たヤコブの財産の取り分が公式に認められ、自分の家に送り出されることになりました。かつて兄の逆鱗に触れ、逃亡者の如くにラバンの家に身を寄せたヤコブでした。そのヤコブが多くを財産を得て家路に着くことになったのです。それはヤコブがラバンの信頼を勝ち得たからではありませんでした。実はヤコブはラバンに隠れて出発していたのです。創世記 31 章 17 節~21 節にラバンの家から逃亡する場面が記されています。彼はこれまでの経験から自分の帰郷が叔父に知られば何も持たせてもらえずに去ることになると考えていたのでしょう(創世記 31:42)。そこでラバンを欺いて逃げ出すことを選んだのでした(同 31:20~21)。ところがラバンの追跡によって逃げ切ることに失敗しました(同 31:23)。ラバンは無礼なヤコブから容赦無く持ち物全てを取り上げる

こともできたでしょう。そうするつもりで追跡したのでしょう。ところがラバンは不思議な経験をします。ラバンは、ヤコブと会う直前に夢に現れた神に「あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにしなさい。」(同 31:24)と警告されたのでした。不思議な経験をしたラバンは、ヤコブとの間に契約を結ぶことにしたのです。ヤコブは自分の家族、財産とともに帰郷することになりました。神の約束が時至って実現したのです。「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」(同 28:15)

▷神は偽りのない真実なお方です(ローマ 3:4)。私たちもそのお方に信頼することができますように。

【3】 神を信じること

ラバンはヤコブと契約を結ぶ際、「どうか、アブラハムの神、ナホルの神、彼らの父祖の神が、われわれの間をさばかれるように。」(同 31:53)と誓いました。この「さばかれるように」(動詞)の原語が複数形になっています。ラバンは自分の夢に現れたアブラハムの神も含め、複数の神々に対して誓ったのでしょう。一方ヤコブは「父イサクの恐れる方にかけて誓った」(同 31:53)と、自分が誰に誓っているのかをはっきりと意識していました。彼はアブラハムと同様に、唯一の神を信じ、そのお方に信頼し、そのお方と人格的な関わりを持っていたのです(同 28:13-15,31:3)

▷今日もみことばを通してご自身を現して下さっているお方を知り、そのお方に信頼して歩みましょう。それが、「神を信じるということ」です。

